

# 国立交通大学 経営管理研究所

## ～2008 Study Tour 訪問記録

2008年10月11日

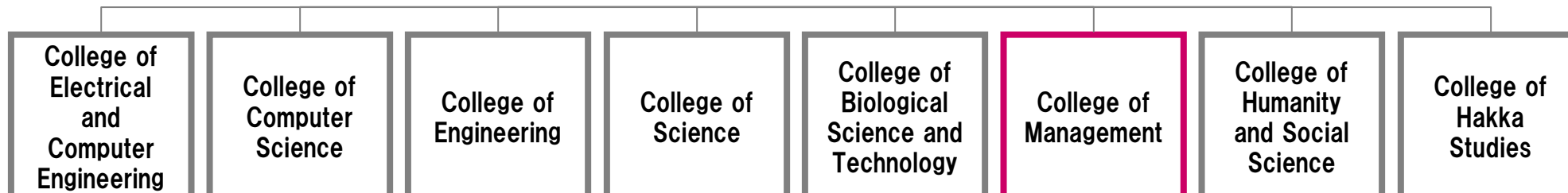
---

# 交通大学とは

## 交通大学とは



- **正式名** : 国立交通大学
- **設立** : 1958年 前身は1896年設立の上海南洋大学
- **所在地** : 台湾 新竹市 大学路1001号
- **教員数** : 約630人
- **学生数** : 約12, 000人
- **学部** : 電子情報工学、情報科学、工学、理学、生物工学、経営管理、人文・社会学、客家文化の8学部
  - 国立理系大学の雄、台湾大学・成功大学・清華大学と並ぶ名門大学
  - 上海交通大学高等教育研究所が公開している世界の大学アカデミック度ランキング(2008)の工学分野で51位にランクイン、台湾の大学としては首位（1位はMIT、早稲田は100位ランク外）



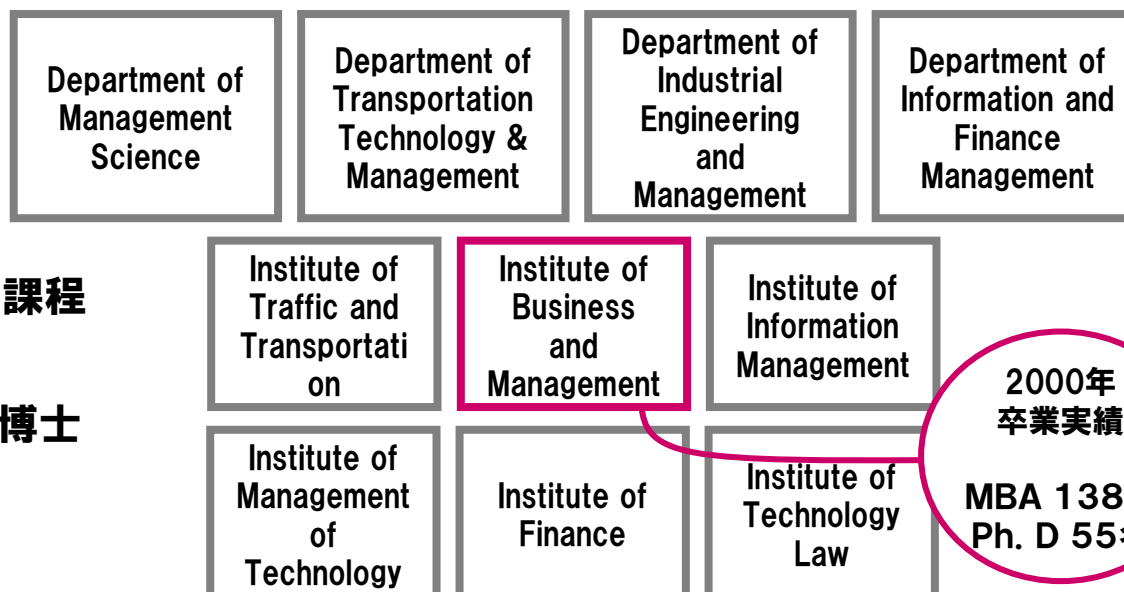
## 交通大学とは

### 交通大学経営管理学部

- 4学系、6研究所で構成
- 学士課程720名、修士課程817名、博士課程401名、MBA791名(2006年実績)
- 85名の講師陣、約9割は米国有名大学の博士号を保持

### 交通大学経営管理研究所

- 1970年設立、実務と学問双方のニーズに応える経営管理の専門家養成を目的
- 政府機関や企業との協働を促進するため、1979年に新竹から台北にキャンパスを移転
- 主な研究領域は意思決定論、ファイナンス、HRM、情報マネジメント、技術経営、マーケティング、組織行動、生産管理など
- フルタイムと夜間MBAのコースが存在、海外からも学生を受け入れ(中国籍は不可)
- 学位取得には論文と口述試験が課せられる(博士号取得には+ジャーナル2本)



## 交流会の概要

- 交通大学経営管理研究所 — 早稲田大学ビジネススクール 交流会
- 日程 : 9月15日 16:30~20:30
- 概要 : 早稲田大学ビジネススクールの2008年度StudyTourの場を活用し、交通大学経営管理研究所の教授および所属学生との交流・親睦を図る。
- 目的 : 両校教授および学生間の交流、人的ネットワークの構築  
双方の研究内容の紹介、台湾および日本における経営・事業・IT分野における知見の相互獲得



# アジェンダ

---

## 1. 交通大学の紹介

## 2. クロスディスカッション

## クロスディスカッションの内容

---

- 下記テーマについて、NCTU・WBS双方教授からプレゼンテーション
- 双方の学生が意見交換、ディスカッションを行った

### セッション1 (from NCTU)

- 内容 NCTU、台湾のIT産業とSOC市場について  
「NCTU, IT Industry and SOC (System-on-a-chip) 」

### セッション2 (from WBS)

- 内容 IT戦略所主要研究テーマの紹介  
「Characteristics of Our Approach for Business Model Analysis」

## 所感

■参加者A:台湾がIT・エレクトロニクス産業立国として確固たる存在感を持つようになった背景として、政府主導の産業クラスターを形成したことはよく挙げられるが、人材の育成についてもポイントとして指摘していたことが印象的であった。台湾においては、IT産業の付加価値・生産性は高く、基本的に高報酬である。理系学生にとっての就職先としても極めて人気が高く、優秀な人材が産業に流入してくる。優秀な人材を獲得できるから産業が成長し、それがまた優秀な人材の育成と獲得につながるという正のスパイラルを実現しているという点である。日本においては、IT産業は新3Kなどといわれ過酷な労働で見返りが少ないというイメージが定着しつつある感があり、学生の就職希望先としても年々その地位を低下する一方である。日本のIT産業が今後、世界をリードする成長とイノベーションを実現していくためになにをすべきか、台湾のような成功事例からのインプリケーション、あるいはアジアという共通の経済圏でどのようなポジショニングをとっていくべきなのか、IT産業に携わる者として非常に学びとなり、考えさせられる点の多い貴重な訪問であった。

■参加者B:交通大学は学生も教職員も、皆、語学力というか表現力に長けていると実感した。非常に英語はもちろんプレゼンテーションが非常に上手だった。教員にUS帰りが多いというのも肯ける。日本を比べるとかなり見劣りしている感が強い。半導体産業など、自動化・集約化が進むと台湾のM字社会(日本で言うところの格差社会?)の度合いが強まると思うが、今後の対処についてどのようにすべきか考えさせられた訪問であった。

## 所感

■参加者C:もっとも興味を惹かれたのは、国の政策としてエレクトロニクスの製造業に力を入れていることもあって、成績の良い優秀な学生は、その分野に就職するという点。給与も同分野が高いとのこと。優秀な学生が入ることで業績も上がるから給与も高くなり、ますます優秀な学生を惹きつけるというGood Cycleが回っているということであった。最も優秀な学生がこぞってInvestment Bankやコンサルティング・ファームに行く日本とは全く異なる環境であり、非常に興味深い。

台湾で全般的に強く感じたのは、思考が製造業寄りであること。今後、これがITサービスにシフトしていくのかに興味があり、注目していきたい。

あと、残念ながら、向こうの学生に英語力では負けていると感じた。

■参加者D:交通大学のMBAコースでは、HBSのケースを使った教育に重点をおくとのことだった。USの大学院出身の教授が多いことも手伝ってか、いわゆるMBA的な知識に加えて、英語の重要性も強く認識していた。一方で、台湾の基幹産業であるIT業界の今後についても危機感を持っているように思えた。ディスカッションのテーマとして選ばれたのは、“The End of Moore’s Law”であった。台湾にはTSMCをはじめとする多くの強力なハードウェア企業があり、彼らにとってはシリコン微細化は最も重要な事柄である。ムーアの法則が維持できなくなったときに、「シリコンチップは材料のようになり、MEMS等の新たなデバイスに競争の舞台が移っていく」、という意見を提示したところ、同意が得られた。